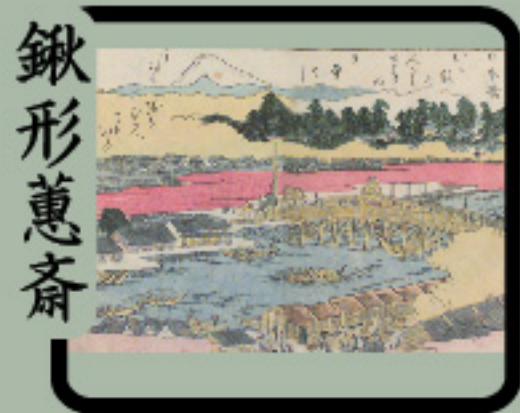


## 鍛形**蕙**斎【くわがた・(わい)さい】[北尾政美【きたお・まさよし】]

明和元年(1764)～文政七年(1824)

江戸浜町の竈河岸【へっついがし】に生まれる。俗称に三治郎、三二郎などがある。父は駿州興津(静岡県)出身で、後に赤羽氏の養子となり、江戸に出てきてからは畳屋を生業とした人である。**蕙**斎は、幼少の頃から絵を好み、絵の才能を認められて北尾重政の門人となった。初めの仕事は弱冠十五歳で三二郎の名で描かれた黄表紙仕立ての絵入り咄本『小鍋立【こなべたて】』(安永七年(1778)刊)、今回出品の『はなし』(9. 安永七年(1778)頃 [江戸]刊)の挿絵である。その後、黄表紙の挿絵を中心に百七十作品余りを描いている。重政の門人には、他に北尾政演【きたお・まさのぶ】(山東京伝)・窪俊満【くぼ・しゅんまん】などがおり、この三人で北尾派三羽鳥と言われた。天明元年(1781)に重政から北尾政美【まさよし】の名を貰い、武者絵、浮絵、鳥瞰図などを描いた。この頃の代表作に絵半切れ『江都名所圖繪【えどめいしよずえ】』(10. 天明五年(1785) [江戸]刊)や黄表紙『鸚鵡返文武二道【おうむがえしぶんぶのふたみち】』(寛政元年(1789))などがある。



鍛形**蕙**斎

寛政六年(1794)に、津山藩(岡山県)松平家の新規お抱え絵師となり、翌年、名前を鍛形**蕙**斎紹真【つぐさね】と改め、狩野養川院惟信【ようせんいんこれのぶ】のもとで、狩野派の画風を学んだ。浮世絵師からお抱え絵師への転向は、当時非常に稀有なことであった。お抱え絵師としての**蕙**斎は、寛政の改革の影響もあり、『略画式』(24. 寛政七年(1795) [江戸]刊)に代表される絵手本類を多く描くようになる。『略画式』はのちの人物・鳥獣・山水・草花・魚貝などの略画式の原型になるもので、**蕙**斎は、この一連の作品でのちに「略画式の**蕙**斎」(「**蕙**斎略画式モノ」参照)と呼ばれる地位を築いた。また略画以外にも、いわゆる当時流行した名所図会の類も多数残しており、「江戸一目図屏風」(文化六年(1809)刊)などがある。『近世職人尽絵詞【きんせいしよくにんづくしえことば】』(文化元年～三年(1804～6))は肉筆画の傑作と言われており、**蕙**斎は、この作品で絵師として独自の地位を不動のものにした。津山藩のお抱え絵師になったが、登用後もほとんど江戸に在住して、津山には文化七年から八年(1810～11)に藩主松平齊孝【なりたか】に随行して一度行ったのみである。文化八年(1811)には小十人組に昇格し、文化九年(1812)には画号を本姓であった赤羽からとって羽赤と改号した。文政七年三月二十二日に江戸で没した。